

生きている 心臓



Kaga, Otohiko

加賀乙彦



生きてゐる心臓



江苏工业学院图书馆
藏书章

加賀乙彦

生きてゐる心臓^{しんぞう} 上

一九九一年七月一〇日 第一刷発行

著者——加賀^{かが}乙彦^{おとひこ}

© Otoniko Kaga 1991, Printed in Japan

発行者——野間佐和子

発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽二―一二―二一 郵便番号一一二―〇一

電話 編集部(〇三)五三九五―三五〇四 販売部(〇三)五三九五―三六二二

製作部(〇三)五三九五―三六一五

印刷所——信毎書籍印刷株式会社

製本所——黒柳製本株式会社

定価——一三〇〇円(本体一二六二円)

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部宛にお送りください。送料小社負担にてお取替えいたします。
なお、この本についてのお問い合わせは文芸局文芸図書第一出版部宛にお願いいたします。

目次

春宵	5
教授室	42
病床	95
死の影	120
ドン・キホーテ	199
手術室	257

装帧 大沼映夫
装帧 永原康史

生
き
て
い
る
心
臓
上

春しゅん
宵しやう

復活祭のミサが終つて教会堂から外へ出ると、ひといきれから解放された鼻をかぐわしい風が撫で、全身が春めいた大氣に包まれた。満開の桜が白く輝かしい笑いをひろげ、連翹の花房が黄の衣をひるがえして踊っている。

神父たちが立っていた。顔見知りの信者たちと話すために、ミサの引けどきに、そうして待っているのだ。ジャンムージャン神父の姿を認めて有作は大腿に近付いて行つた。蝶子は息子と娘と連れ立って、夫の後を追つた。

「おや、天木先生」と神父は長身をかがめて手を差し出した。「奥さん、坊やにお嬢ちゃん」と一人一人の手を握る。

「この前、娘が神父さまのお話を聴かせていただいたそうで」と蝶子は娘を前に出した。娘の有子はカトリック系のF学園に通っていて、最近、神父の講演を聴いたのだ。

「そうそう。何年生だっけ。あ、新一年生ね。ぼくの話わかった」と神父は有子に顔を寄せ

た。

「わかった」と有子は、神父を真っ直に見上げて、はっきり言った。それから物怖しものおせぬ口調で付け加えた。「面白かったから、みんな笑ったの」

「そうそう。笑ってくれたね。ぼくの話、面白いからね」神父は体をゆすった。まるで体全体で笑っているようだった。と思うと、一転、急に背筋を伸ばし、真顔を有作に向けた。右の人差し指を立てて脅すように言う。

「で、天木先生、例の件、引き受けて下さいますか」

「はい。何とか都合をつけていたします。神父さまでは、断れない」

「よかったあ」神父は、後ろに倒れてしまいそうなほどのけぞると、両手で万歳をした。「これで一件落着、めでたい、めでたい」

蝶子は目を丸くした。この南フランス出身の神父は、何かにつけて仕種がおおぎょうである。子供は正直で、有子も息子せきこの清作も、吹き出した。

「ただし」と有作は重々しく言った。「わたしの経験は十数年前ので、もう古いですよ」

「えっ、何の話？ 先生は現職の精神科医でしょう」

「わたしが死刑囚に会ったのはもう十数年前ですから」

「ああ、死刑囚……それも先生にお願いしてましたね。そっちのほうじゃなく、死にかけている心臓病の患者さんのほうです。ノイローゼらしい。先生の往診を是非たのみますよ」

「あっ、そっちの話ですか」

「そっちの話……いいえ両方よ。先生にはお願いすること多いね」

「神父さまは毎度のことです……」

「そうだよ」神父は当然のことだと言うように数回頷いた。

別な信者が来たので、有作たちは神父を離れた。地下鉄の四谷駅よつやに向って歩きながら蝶子は尋ねた。

「何だとおっしゃるの」

「例によって患者の紹介と……それに、月末の信徒会総会で、死刑囚の心理について話してくれというのだ。四月は学会があつて多忙だからと一旦は断つたんだが、面と向つてああ言われると断れなくなつた」

「死刑囚……」と蝶子は呟いた。有作は、ずっと以前拘置所の医官をしていたとき、死刑囚たちに接し、彼らに多い拘禁こうきんノイローゼを精神科医として治療していたのだ。ときどき、家でも彼らの思い出を語つたりするが、まとまつた話をしたことがない。

「わたしも聴いてみたいわ」と蝶子は言った。「死を前にした、人間の心理。ぜひ」

「あのジャンムージャン神父は、医学で助けられなくなった重症の患者さんに、死の心構えをさせる『死の看取り』に熱心に従事していてね、ぼくの死刑囚の話なんかも参考になるらしいんだ」

「それは参考になるわよ」と蝶子は誇らしげに言った。その学問の価値は自分には理解できないけれども、夫がひとかどの学者だとは思っていた。医科大学の精神科教授である人が、学者

でないはずはないと無邪気に信じていた。

「しかし、あの神父は大変な人だ。カトリックの神父には学者が多いが、あの人は仏教にも詳しいし、古今の死の哲学を極めているし、著作も多い。それに実践家だ。ぼくの大学病院にもよく来訪して、末期患者の看護をしている。看護婦と一緒にあって汚物の世話までするんだ。ぼくのほうは、いつも教わるばかりでね、神父に参考になることなんか、ひとかけらも話せない気がする」

親たちがむつかしい話を始めたので、子供たちはホームの先のほうに行つて、ふざけている。有子がわざとホームから落ちそうにするのを、清作が止めている。あぶないからやめなさいと言おうとしたとき電車が入つてきて、蝶子は悲鳴をあげた。無事だった。有子は清作の腕の中で痙攣をおこしたように震えていた。蝶子は有子を叱りつけた。「ばかね。冗談にもあんなことするもんじゃない。死んだら、どうするのよ」

電車の中で有子は泣きだした。一度泣き出すと、駄々っ児になり、親を困らそうとして大声を出す。蝶子は閉口してなだめに掛つた。

「もういいわ。泣かないのよ、ね」すると有子はびたりと泣きやみ、すぐさま清作の手を引いて遠ざかり、何やら話し込んでいる。どうも子供にはかなわないと夫を見ると、目を眇めてみせた。

茗荷谷駅みょうがだにから小石川こいしかわのマンションに帰る途中、目が覚めるように桜並木が明るかった。風に舞う花の下には、屋台店が並び、人々が群れ、昨夜の宴の跡らしく、汚れた筵や紙屑の山が打

ち捨てられていた。

「植物園の花を見に行こう」と桜並木を抜けると、有作はさらに先に進んだ。こういう夫の氣まぐれに蝶子は馴れている。朝家を出るときは、教会から帰ったら市ヶ谷の両親を訪ねようと云っていたのだ。

門前のパン屋で稲荷鮓、菓子パン、チーズ、缶ジュースなどを買い揃え、一同は坂道を登っていった。高台が桜の広場になっている。

ここの染井吉野は、下の桜並木のように戦後植えられたものと違い、いずれも昔からの大木である。青空に縦横自在にのびた枝に咲き競う花は、溜息が出るほどに見事であった。事実、蝶子は夫と並んで、大きく溜息をついた。

「すごいもんだねえ」と有作は言った。「これだけの無数の花を、春になると一斉に咲かせてしまう。しかも、その花の一つ一つは、微妙に違って個性がある。大きさ、形、色合い、勢いまでが全部違う。そして、一つの花を構成している細胞の微細構造は、驚くべく精緻で美しい。いま風に翻ったあの花びら一枚だって人間には作れはしない」

「ほんと、すごいわ」と蝶子は相槌を打った。

「ぼくはねえ、毎年ここに來て花を見るたびに、自分の人生で、あと何回これを見られるだろうかと思う」

「なさけないこと言わないでよ。あなた、まだ若いのに」

「若くはないさ。もう四十三だ。死は確実に近付いている」

「ジャンムージャン神父さまの影響ね。花見まで死の看取りになるんだわ」と蝶子は茶化すように言った。

「その通りだ。死を前にしている人の目で花を見ると、限りもなく美しく見えるもんだよ」有作は生真面目に言った。「死刑囚がそうだ。彼らはいつも明朝処刑されるかも知れないという生活を強いられている。すると、生きている一刻一刻がものすごく貴重になる。独房の窓から、わずかに見える遠くの花が、この世の見納めの、一回こっきりの、無上の恵みなんだ」

「それはいいけど、あなた、死刑囚じゃないでしょう。人生八十の現代人よ」

「神の前では千年も一日のごとしだ。人生、八十なんて、束の間だ」

「もう死の話はやめましょう。気が滅入ってしまう」

子供たちが走ってきて息を弾ませた。

「ママ、アイスクリーム買って」と有子が言う。「ほく、お腹空いちゃった」と清作は腹を撫でた。

「よし、花より団子といこう」有作は木の下を物色した。弁当、酒宴、恋人同士の語らい……人々は思い思いに場所を占領している。やっと隙間を見付け、一家四人は車坐になった。花吹雪のさなか、木洩れ日に撫でられている夫や子供たちを見回していると、蝶子は、いま自分が幸せな状態にいと、ふと思った。夫は日頃多忙をこぼしてはいるが、おのれの仕事に満足していて、着々と研究成果をあげ、教室員の受けもよい。息子は公立の中学校だが、娘は高等学校までエスカレーターで行ける私立のミッションスクールに入れていて、学費の高いのは難だ

が、何とか安定した小学校で、差し当り入試やいじめなどの問題もない。そして自分は平凡な主婦として、大して生活上の不如意もなく暮している。何だか生暖い、この春の風のように心地のよい境遇だ。が、そう思ったとき、不意に黒々とした不安が胸をよぎった。

「どうしたね」と有作が尋ねた。度の強い眼鏡の奥で、小さな目が豆電球のように光っている。

「何か、わたしの顔が変なの」と蝶子は聞き返した。

「変じゃないけれど、何だかとても辛そうでさ、体のどこかが痛むんじゃないかと思って」

この人は鋭い、鋭すぎると蝶子は思った。多分精神科医としての修練のたまものだろう。人の表情のほんの些細な変化を敏感に読み取ってしまう。

「痛むのは心よ。あなたが死の話なんかさるから……花が散るように、人生の幸せなんて長続きしないって、ふと考えたら、怖くなった……」

「花の下で無粋な発言だった。あやまる。もう忘れなさい」

「もう忘れなさい」と有子が父の口真似をした。両の人差指と親指で眼鏡の形をつくり、ちょっと顎を突き出す癖まで真似ている。

「こいつ」と父は娘の薄い皮の顎を突いた。

「パパ」と清作が言った。

「きょうはテニスやらないの」

「あ、今何時だ。一時二十分か。コートは三時から五時まで借りてあるんだったな。なら間に

合う」

「市ヶ谷は、どうするの」と蝶子が心配そうに言った。

「きのう、日曜日にはみんなでおいでとお誘いがあったでしょう」

「そうだった、忘れてた」有作は右の掌で後頭部を撫でた。すかさず有子が真似した。「弱ったな」

「けさは、教会から帰ったら市ヶ谷へ行く予定だったじゃない。てっきりそのつもりでいたら、突然植物園に行こうなんて……」

「言ってくれりゃいいのに、すっかり忘れてたんだ」

「言えよ、あなた、怒るだけだもの。おれがせっかく、花見に行こうと言ってるのに、とかなるとか。ともかく、市ヶ谷では待ちくたびれてるわ。おばあちゃんのことだから、昼御飯をご馳走しようと腕に縊もをかけたお料理の数々……」

「大変だ、電話しなきゃ」

「お電話したら行かなきゃなくなるわ。するとテニスはできない」

「いやだ、ぼく、テニスやりたい」と清作が口を尖らした。

「有子、おじいちゃん、おばあちゃんとか、行きたいよ」と有子が兄の真似をして口を尖らした。

「ともかくお電話したほうがいいわ。でもむこうが、ぜひ来いと言ったら行かなきゃならないわよ。行かないで、あとで散々嫌味を言われるのは、このママなんですからね」蝶子は息子と

夫に、代る代る念を押すように點頭した。

「あなた、電話して下さいな」

「いいや、きみがしてくれ」

「あなたのおかあさまよ」

「だから困る。母は強しで、言い負かされちまう」

「いつも、嫌なお役目はわたしね。何て言い訳するの。忘れてしまったって……」

「花見に来ないかと言ってくれ。満開の桜と一緒に見ましよう」と誘うんだ。桜並木の夜桜がいい。夕食をおごりますと言えば喜ぶよ」

「わたしのお料理で……」

「いいや、レストランへ行こう。『イエスタデイ』なんかどうだろう」

「はい。そんならよろしいです」と蝶子はにっこりした。これで市ヶ谷行きと夕食との、二つの手間がはぶけたわけだった。

売店前の公衆電話には六人が列を作っていた。近くにはほかに電話は見当らず、仕方なしに待つことにした。

市ヶ谷の舅しゅうとの善作と姑しゅうとめの晴子は、孫たちに会いたがっていた。有作には姉の智子と妹の善子がいて、それぞれ子持ちだが、智子は北海道に住んでいるため縁遠く、善子は東京にいるのに、両親と仲が悪くてあまり近寄らなかつたから、有作の子が孫として可愛がられてきた。もっとも晴子は、蝶子に、「内孫のほうが外孫よりかわゆいのよ」と説明するのが常だった。

孫たちが幼いときは往き来が頻繁だった。しかし、数年前、有作がロスアンジェルスのある大学の客員教授となつて、一家四人が二年間滞在し、一昨年帰国したあとは、清作は小学校、有子は幼稚園で、子供なりにいろいろ都合ができて、なかなか会えず、それではせめて日曜日にでも顔を見せなさいと、これは舅の希望とされたが実際は姑の差し金で言い渡されたところ、やはり段々間遠になり、姑からはやいのやいのと催促の電話が掛ってくるのだった。

やっと番が来た。晴子の、鼓膜を突く大声が、用心してあらかじめ離してあつた受話器から響いてきた。

「まあまあ、どうしたの。散々待つてたのよ。いろいろ用意していたのに。それはまあお婆さんの手作りです。まずいだろうけれど、昨夜から一所懸命作つた五目鮭よ。きょうは教会の帰りに来るというからお昼と一緒にしようと思つてたの。ケーキもあるの。有子ちゃんの好きなカド菓子店の茸籠(きんろう)ケーキをわざわざ注文したの。それに、清作ちゃんのために、おじいちゃまが秋葉原にお出ましで買ったファミコン・ソフト、何とかイーグル・ゲーム、とにかくすぐいらっしやい。お昼食べちゃつたつて、冗談じゃないわよ……」

じつと聞きながら蝶子は戦術を考えた。言いたいだけ言わせてしまひ、相手が言い過ぎたと後悔した頃合いを見計つて、相手の言い分を取り入れながら、こちらの希望を通す、こういう企みには蝶子は慣れていた。

「もしもし、おばあちゃま、本当に申し訳ありませんでした。あんまりお天気がよくて、桜が綺麗なもんですから、それではおじいちゃま、おばあちゃま、お呼びして、ご一緒にお花見し